



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 再考 インプットの質と量

巻頭エッセイ

彼女に泣かれた 野矢茂樹 01

特集 多量のインプットで英語力を育む 松沢伸二 02
リーディングを通してインプットを増やす工夫 森 千鶴 06
生徒が輝く語彙指導 私の心構え ～笑顔と涙と得点力～ 山田健介 10

連載 英語教師のための基礎講座 英語授業力講座 高橋貞雄 12
評価クリニック 「時間差テスト」の動機 根岸雅史 14

授業レポート 話す、書く、文法指導を自在につなぐ Creative Writing (1) 加藤京子 16

小学校英語 Just Now 学級担任を中心とした外国語活動(英語活動)の取組 馬場直子 19

単語の文化的意味 76 happy 森住 衛 21

Essay The Perfect Omyage (Part 2) Don Maybin 22

英語教師のリソース 電子黒板とデジタル教材を使ってみよう

— デジタル教科書: NEW CROWN [デジタルテキスト] — 酒井英樹 23

AROUND THE WORLD 失われていくものと残したいもの(アラスカ・エスキモー) [1] 田村幸誠 表紙裏

表紙写真について カンボジアの王宮 室井美穂子 表紙裏

Vol.19

FALL 2010
SANSEIDO

異文化理解は面白い

「専門は英語学なのですが、縁あって、2004年に1年近くアラスカ州・フェアバンクス市で過ごす機会があり、大学に勤めてからは、毎年夏に、時間の許す限りフェアバンクスに出かけていって、そのとき知り合ったエスキモー夫妻の所でエスキモー語を習っています。」こんな自己紹介を初めて会った人にすると、返ってくる言葉は、大抵「アザラシの肉って美味しいの?」や「野生動物の毛皮生活はどう?」というものである。中には「そりゃ、エスキモーだもの、生肉だよな」と自信満々(?)に会話に入ってくる人もいる。自己紹介後に繰り返されるこんな質問に、私は「アザラシってレバ刺しに近い感じで結構いけますよ」とか「トナカイ皮の靴って軽くて丈夫なんですよ」と答える。私の返答は事実なのだが、それ以上に興味深いことは、上の自己紹介で、私は、俗に言う原始的な生活を体験したとは一言も言っていないにもかかわらず、会話はいつも『エスキモー=氷の上でアザラシを突ついている』、そんな固く強い先入観で始まることにある。ポケモンがエスキモーの子どもたちに人気があるとか、デニースと一緒に食事したときの話を続けても、やはり、返ってくるのは「冬は電気がなくて大丈夫?」や「で、何を食べてたの?」などの言葉である。その強い先入観をなかなか融解できず、最近では先のような受け答えでお茶を濁すようになってしまった。

ところが一方で、現在のエスキモーの人たちに、ア

ザラシや毛皮の生活文化がないのかと問えば、その答えは、村に暮らしていようが、都市に暮らしていようが、あるということになる。ここには、日本の文化は侍、寿司、お寺なのかと外国人に聞かれたときと同じような難しさと面白さがある。様々な理由から、我々のライフ・スタイルは大きく変化する一方で、やはり、どこかに伝統的な考え方や生活も残されているし、大切にしたいという意識もはたらく。今回の連載では、ステレオタイプのエスキモーのイメージを崩しつつも、現在に残る彼らの素晴らしい考え方や生活を紹介していきたい。

ところで、最近日本で熊が人を襲ったというニュースをよく見聞きする。ニュース解説によると、一つの原因は日本の里山が荒れていることにあるという。山から餌を探しに降りてきた熊が、そのまま草木が生え放題になっている所を抜ける。すると、そこに突然人のいる世界が現れ、パニックを起こすのだという。この話を先のエスキモー夫妻にすると、旦那さんの方が、「野生動物と共存するには、いつも動物から人間が見えるようにして、動物を安心させておかないと。村では家の周りや獣道を掃いたり、こちらの様子を見えるようにしているよ」とおっしゃった。動物から人間が見えるように生活する。その発想に本当に驚かされた。自分には思いもよらなかった視点が他の人たちには当然のこととわかったときこそ、異文化が本当に面白いと感じられる瞬間である。

表紙写真
について

カンボジアの王宮

室井美稚子 Muroi Michiko (清泉女学院大学)



抜けるような青い空に、黄金に輝く王宮の屋根が美しい。ここはカンボジアの首都プノンベン。今も国王が居住する宮殿である。熱帯モンスーン気候のこの地では11月から5月が乾期で、空が晴れ渡る。新旧を問わず、この地の名だたる建物の屋根には龍がシャチホコのように飾られ、その独特の角度が情緒をかもしだしている。この造形は、どこか民族舞踊の優美に反り返った手の動きを連想させる。王宮内の650メートルもの柱廊の壁には東南アジア一帯に伝承されてきた物語が美しい彩

色で描かれている。ゆっくりと歩きながら、アジアの絵巻を楽しんでほしい。

外に出ると、大路が計画的に造られていて、かつて『東洋のパリ』『インドシナのオアシス』と呼ばれていたことが納得できる。バイクや自転車に客車をつけたトゥクトゥクの運転手たちが客を引いており、交渉が成立すれば、ゆったりと風を受けて景色を楽しみたい。今は国の再建に向けてあちこちで工事が行われている。バイクタクシーに、子どもを含めて5人も乗っているのを目にする

と、驚くと同時にそのエネルギーと工夫に感心してしまうかもしれない。

北部の世界遺産のアンコールワットは秀逸であるが、是非首都プノンベンにも訪れてほしい。ポル・ポト時代の負の遺産が多く、特にトゥール・スレン博物館に行かれることをお勧めしたい。フランス領時代の立派な学校の建物で、かくもおぞましいことに使われたのかと、目を覆いたくなるほどである。その歴史をカンボジアの人々はどのように乗り越えようとしているのか、考えさせられることも多い。



彼女に泣かれた

野矢 茂樹 Noya Shigeki

認知言語学者の西村義樹さんに「間接受身」というのを教わった。私は哲学が専門で、言語学は素人であるが、とても面白い話題であったし、少し私なりに考えたこともあるので、書いてみたい。

「彼女に泣かれた。」—— 受身なのだが、能動形はない。そこで間接受身と言われる。興味深いのは、英語では「彼女に泣かれた」という受身形の文を作れないというのである。といっても、間接受身がまったくだめというわけではない。例えば“*I was rained on.*”とか“*I got rained on.*”といった言い方はするらしい。なんと、“rain”が受身になるのである。しかし、このような例もあるが、一般的には間接受身は英語では表現しにくいという。

では、なぜ能動形のないところで受身を作るのだろう。私は愚考した。どうもこれは、私が困った場合、つらかった場合なのではないか。その受苦の感情が、受身の形を求める。さらに、ここには、「私にはどうしようもない」という諦め感も漂っているように私には感じられる。このどうしようもなきが、受身表現になるんじゃないか。

すると西村さんは我が意を得たりとばかりに、さらに話を押し進めた。「そうなんです。例えば財布を落としたときに、「財布に落ちられた」とは言えませんよね。財布の場合は、自分でどうにかしようがあると考えられているからでしょう。」

すると、一般化して、「あることごとによって私が困らされ、しかもそれが私にはどうしようもないものである場合には、それを受身で表現しよう」と言えそうである。だが、そこで私は反例を思いついた。人前でおならが出たことによって私が困らされ、しかもそれは私にはどうしようもないことであ

るにもかかわらず、「おならに出られた」とは言わない。「出もの腫れもの」は私にはどうしようもないことだが、「にきびに出られた」とも言わない。「高熱に出られた」とも言わないのである。なんだか私はもうすっかり楽しくなってきた。

受身にするからには、相手は私にとって「他者」でなければならない。雨に対して、われわれはなにがしかの他者性を感じとり、「雨に降られた」と受身にする。他方、おならは我が身の内から生じたものであり、われわれはおならに自己を外部からおびやかす他者性を認めていない。つまり、ここには三つの要因がある。①受苦、②諦念、③他者性。本来自動詞で表わされることがらに対して、そこに私を苦しめる他者の姿を、諦めとともに見て取るとき、われわれはそれを能動形なき受身の形で表現する。私としては、なんとなく、これってとても「日本的」だなあと感じ入ったのである。

そこで考えてみていただきたい、「雷に落ちられた」や「火山に噴火された」は日本語としてどのくらい自然だろうか。「火山に噴火されて飛行機が欠航になった。」—— どうでしょう。これは、雷や火山の噴火にどれほど他者性を認めるかということで、案外ひとによって意見が分かれるようである。

のや しげき

1954年東京に生まれる。東京大学教養学部卒。北海道大学文学部助教授を経て、現在東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に『哲学の謎』『無限論の教室』『はじめて考えるときのように』『論理トレーニング101題』『新版 論理トレーニング』『入門！ 論理学』『哲学・航海日誌』など。

多量のインプットで英語力を育む

松沢伸二

(新潟大学)

1. はじめに

英語の学習指導におけるインプットは、生徒が聞いたり読んだりする英語である。生徒は、このインプットなしには英語力を育むことができない。一方、アウトプットは、生徒が話したり書いたりする英語を指す。生徒が英語力を確実に定着させるには、アウトプットの機会も必要である。

よく知られているように、インプットについては、インプット仮説 (Input Hypothesis) がある。これは Krashen が主張したもので、学習者は、自分の英語力を少し超えたレベルの理解可能なインプットに接することで、英語力を伸ばすとする仮説である。アウトプットには、アウトプット仮説 (Output Hypothesis) がある。こちらは、学習者が英語力を伸ばすには、理解可能なインプットに接することに加えて、英語を話したり書いたりする出力の機会が不可欠であるとする仮説で、Swain が提案した。

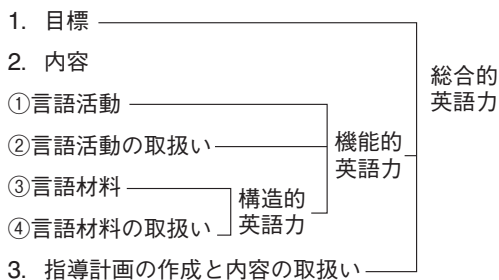
生徒の英語力を育むには、発達段階に応じてインプット仮説とアウトプット仮説の両者のバランスに配慮した指導が有効である。本稿では、学習初期の中学生に重要なインプットと英語力の関係を考察する。新学習指導要領はインプットを増やす方向に踏み出したが、その背景には何があったのか。新学習指導要領に基づいて編纂される新しい教科書では、生徒が聞く・読む分量が増えるが、移行措置期間の現在はどのような対応がとれるだろうか。

2. 中学で育む英語力

生徒にインプットを与えて英語力を育むとき、その英語力には構造的 (structural)、機能的 (functional)、総合的 (overall) なものがある。構

造的英語力は、語彙や文法といった英語の下位システムの知識を習得し、文レベルで正確に使う下位技能である。機能的英語力は、英語の下位システムの知識や下位技能やその他の知識を駆使して、実生活で要求される課題を英語を用いて遂行する能力である。総合的英語力は、構造的英語力と機能的英語力に加えて、学習指導要領の目標に示されている「言語や文化に対する理解」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を含む総体である。

この3種類の英語力と学習指導要領の記述の関係は、以下のように図示される。



中学校学習指導要領は、英語の言語材料を、音声、文字及び符号、語、連語及び慣用表現、文法事項の範疇で規程している。構造的英語力は、これらの英語の言語材料を習得して使う学力である。学習指導要領は、また、中学生ができるようになるべき言語活動を、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能に分けて挙げている。言語活動の一例は、「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること」であるが、学習指導要領は、こうした言語活動を1技能に5つずつ、合計20示している。機能的英語力は、先の言語材料をこの言語活動に用いることができる学力であると言える。最後に、学習指導要領は、世界や我が国の生活や文化に

についての理解、様々な言語や文化に対する関心、国際社会に生きる日本人としての自覚などを養うことも英語教育に求めている。構造的英語力と機能的英語力に、こうした理解・関心・自覚・態度を加えたものが総合的英語力である。

3. インプットが育む英語力

英語の学習指導でのインプットは、生徒が聞いたり読んだりする英語であるから、授業の内外で生徒が英語を聞いたり読んだりする活動は、インプット活動と呼ばれる。

Rost は *Teaching and Researching: Listening* (Pearson ESL, 2001) という著書で、聞くことのインプット活動には2つの役割があると述べている。1つは「第2言語での聞き方を学ぶこと」(learning to listen in the L2)であり、もう1つは「聞くことを通して第2言語を学ぶこと」(learning the L2 through listening)であると言う。前者の役割は、英語で聞くことの言語活動ができるようになることであるから、聞くことの機能的英語力の育成である。後者の役割は、英語を聞いて英語の音声、語、連語、慣用表現及び文法事項を習得することであるから、構造的英語力の育成である。

このRostの聞くことの考え方は、読むことにも当てはまる。すなわち、読むことのインプット活動の1つの役割は、「第2言語での読み方を学ぶこと」(learning to read in the L2)であり、もう1つの役割は、「読むことを通して第2言語を学ぶこと」(learning the L2 through reading)である。前者の役割は、英語で読むことの言語活動ができるようになることであり、読むことの機能的英語力の育成である。後者の役割は、英語を読んで、文字、符号、語、連語、慣用表現及び文法事項を習得することであり、構造的英語力の育成である。

池野修氏は、本誌の前号で、英語教科書の「本文」には、“text for mind and heart enrichment”として、意味のあるメッセージ内容を読み、それについて考えることを通して、中学生の知的・精神的成長を育む役割があると指摘している (*Teaching English Now* Vol.18, 2010)。確かに、3年生の

教科書でA Vulture and a Childの文章を読んで、内戦や飢饉で苦しむスーダンの状況や報道の倫理について考えたり、I Have a Dreamのレッスンでキング牧師のスピーチを肉声で聞いて、人種問題について考えたりする行為は、多くの中学生の心を揺さぶる。これらは異文化に対する関心や理解、国際社会に生きる日本人の自覚などを養うことに資するから、聞く・読むことのインプット活動には、総合的英語力を育む役割もあると言える。(なお、インプット活動が、話すこと・書くことの機能的学力の伸長に間接的に寄与することは、もちろんである。)

ここで、聞くことと読むことの機能的英語力には、メディエーション (mediation) の技能もあることを確認したい。メディエーションとは、英語と日本語を仲介する技能である。生徒が、英語のスピーチを聞いてその要点を日本語で述べたり、日本語で書いたスピーチ原稿を英語にしたりするスキルである。これらは、これまで英文和訳力・和文英訳力と言われ、「英語教育は聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能、それに英文和訳力・和文英訳力を加えた5技能を育成する」などと言及されてきた。

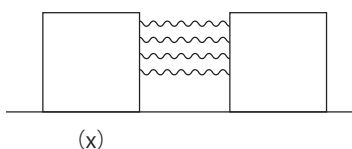
2つの言葉を仲介する行為は、自国にいる外国人観光客に対応する際や、科学論文を正確に訳して理解するときなど、日常の外国語使用で普通に見られることから、欧州評議会のCEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) はこれをメディエーションと呼んで、学習者のニーズに応じて指導するとした。こうした力は日本の高校入試でも測られるから、中学生が取り組むインプット活動には、機能的英語力としてのメディエーション力を育む役割もあると言える。

4. インプットと英語力の定着

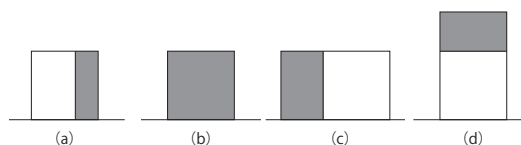
中学校の英語教科書には、「本文」に読むことのインプット活動に資する教材があり、リスニング課題に聞くことのインプット活動に資する音声がある。外国語の習得に対する適性が高い学習者であれば、こうした読むこと・聞くことの教材に触れて課題解決を行う「1度のインプット活動」で、言語材料や言語技能を習得し、構造的学力と機能的学力を伸長す

ることができる。

しかしながら、現行の英語週3時間体制では、授業と授業の間が空き過ぎ、多くの生徒は一度身につけた知識・技能を忘れがちである。また、現在の中学生は、他教科の勉強はもとより部活やテレビやゲームなど、せっかく定着させた英語の知識・技能に干渉し、やせ細らせてしまう刺激に囲まれて生活している。今、仮に、インプット活動で育む学力を「川の堤防」に、ようやく育まれた学力を剥ぐ要因を「川に流れる水」に例えると、現状は以下のように図示される。



いま左側の(土砂でできている)堤防(x)を工事して、川の水に流されないように強くする方法を考えると、以下の4つの方法があることに気づく。

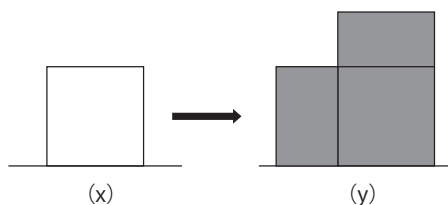


(a)は、堤防の一部が既に川の水で流されているときで、これには土砂を補充して治す必要がある。(b)は、堤防が柔らかいときで、これには土砂を加え、重機を反復させて固くする。(c)は、土砂を堤防の横に補強して、堤防の幅を広げて強くする方法である。最後の(d)は、土砂を堤防の上に積んで、堤防を高くして洪水に備えるものである。

インプット活動で育まれた生徒の壊れそうな学力も、同様の手だてを施すことで、忘却や干渉などの学習阻害要因から守ることができる。教科書を用いるインプット活動で、既習事項としていた語彙・文法が実際には生徒に定着していなかった場合、教員は、前の学習に戻ってそれらを補う必要がある。これは(a)と同じ行為であり、補充学習と言われる。また、生徒によっては「1度のインプット活動」では語彙・文法や技能の定着が不確かなので、英語を暗記するまで同じインプット活動を繰り返し、学力を

定着させる必要がある。これは(b)と同じ行為であり、反復学習である。生徒の学力の補強は、さらに、教科書のインプット活動と似ているが同一ではない平行課題(parallel task)に取り組むことでもなされる。これは(c)のように広げる活動であり、補強学習である。最後に、生徒は、インプット仮説に立って少し上のレベルの発展課題(extension task)に取り組むことで、知識と技能を定着させ、今よりも高いレベルにすることができる。これは(d)の高める活動で、発展学習である。

下図は、左側の堤防(x)が当初のものであり、矢印の先の堤防(y)が、(a)～(d)の工事全てを施したあとの最強の堤防の姿である。



生徒の学力についても、同様に、クラス全体で取り組むコア活動として、教科書の聞くこと・読むことのインプット活動を行ったあとに、個々の生徒の定着の程度に応じて、補充学習、反復学習、補強学習、発展学習としてのインプット活動を追加して行うことで、英語力をより確実に育むことができる。

5. インプットと英語力の到達レベル

先の(a)～(c)では、工事のあとの堤防の高さが変わっていない。インプット活動によって育む英語力についても、同様に、目標とする学力の最終到達レベルを変えないのであれば、生徒は補充学習、反復学習、補強学習に取り組むことでよい。これは、少ないインプットを確実にものにする指導法と言える。一方、(d)の堤防は、工事後に高くなっている。インプット活動によって育む英語力についても、同様に、教科書で共通に取り組むインプット活動のあとに、さらに発展学習としてのインプット活動に取り組むことで、生徒の英語力の最終到達レベルを引き上げることができる。これは、高いレベルのインプットを加えてより高いレベルの学力を育む指導法である。

グローバル化が進行し、人、物、情報が国境を超えて頻繁に行き交う時代を迎えている。こうした国際協力や国際競争の時代に生きるこれからの生徒に対しては、その英語力の最終到達レベルを引き上げる必要があり、学校教育はそのために必要な措置を行うという教育政策が決定された。

このことを語彙の習得を例にして検証する。2006年の中央教育審議会教育課程部会「審議経過報告」は、「今後は、発信力が重視されるので、基本的な語、連語及び慣用表現の意味と使い方が分かることなどといった基礎的・基本的な知識を定着させることが必要である」と述べ、語彙の定着が重要であると指摘した。2008年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」は、「コミュニケーションにおける使用頻度の高い慣用表現や指導すべき語数を充実する方向で見直す」として、生徒が習得する語彙量を増やす必要性を述べた。

この結果、2012年度から中学校で、2013年度から高校で実施される新学習指導要領に基づく英語教育では、中学で習得する語彙数が現行の900語から1,200語に増え、高校で習得する語彙数が現行の1,300語から1,800語に増える。中高6年間で習得する語彙数は、現行の2,200語から3,000語に増える。これに対応するためにも、中学校英語の授業時間を週3時間から4時間に増やし、英語を中学校で最大の授業時間を持つ教科にした。

新学習指導要領は、このように語彙学習の最終到達レベルを上げ、授業時間を増やすという対応を取ることで、補充学習、反復学習、補強学習、発展学習への取り組みを担保し、英語の語彙の習得を充実させる方向に踏み出した。中学と高校の新しい英語教科書を用いる指導では、当然、聞くことと話すことのインプット活動において、習得する語彙の量が増えたり、語彙に何度も接する機会が増えたりすることになる。こうして多くの生徒が、現状よりも高いレベルの語彙知識を、より確実に習得することが期待されることになった。

実は、この度の学習指導要領でのインプットを増やす対応でも、近隣諸国の英語教育と比べると、我が国の生徒が接するインプットは見劣りがする。以

下は日本と中国・韓国・台湾の教科書を比較・分析した投野由紀夫氏の指摘の一部である(2008年5月16日の教育再生懇談会会議でのプレゼンテーションの資料より)。

1. 日本の英語教科書は中学3年間の内容でほぼ1000語を教えており、アジア諸国(中・韓・台)の小学校終了時のレベルに相当する。
2. さらにアジア諸国の中学英語は、日本の語彙量の2~3倍、接触するテキスト量は3~5倍に上る。
3. 日本は高校教科書で背伸びをしており、語彙量を増加している割には少ないテキスト量でそれを達成しようとしており、無理がある作りになっている。

ここに見られる語彙のインプットについての質的・量的な不足の指摘は、インプットが育む他の英語力(文法などの言語材料や聞く・話す言語技能など)についても同様に当てはまると推測される。

6. おわりに

これまで、インプットが、生徒の言語材料、聞くこと・話すこと・メディエーションの言語技能、それに国際社会に生きる日本人の自覚などの関心・意欲・態度を育むことを見た。また、現行の学習指導要領に基づく英語教科書のインプット教材は、週3時間体制のもとで、少ないインプットで低めの学力レベルに確実に到達するように編纂されていることも確認した。

現在の中学校教育での英語は、授業がわかる生徒とわからない生徒がはっきりと分かれる「ふたこぶラクダ」の度合いが最も高い教科になっている。新しい教科書での授業が始まる前の移行措置期間である現在、インプット活動を充実させることで、授業がわかる生徒を増やし、クラスの集団の学力が右端に集まる「ひとこぶラクダ」にしたい。

そのためには、家庭学習や選択の時間なども有効に活用し、教科書と同じ活動に何度も取り組む反復学習をしたり、教科書と同様の平行課題に取り組む補強学習をしたりして、生徒が接するインプットを豊富にする取り組みが有効だと考える。

リーディングを通してインプットを増やす工夫

森 千鶴

(福岡教育大学)

1. リーディングを通してのインプット

Krashen が 1980 年代半ばに提唱したインプット仮説を引用するまでもなく、インプットの質と量は外国語教育における重要な課題である。日本のような EFL 環境においては特に、英語の授業時や授業外において、いかにして良質で多量のインプットを得るかが学習者の成功を左右するといっても過言ではない。学習者は質のよいインプットを多量に受けることで、その外国語に慣れることができるし、意味がわかってもらわなくても、繰り返し出てくる語彙や文法にはおのずと注意が向けられ、将来の習得につながる。ここではリーディングや、リーディング関連活動を通して、いかにして良質で多量のインプットを得ることができるか、その方策を考える。

2. トップダウン処理を用いたリーディング

リーディングの過程には、ボトムアップ処理とトップダウン処理があることはよく知られている。熟達した読み手はどちらか一方の処理だけを用いているわけではなく、ボトムアップ処理を基本としながら適宜トップダウン処理を用いるなど、両方を補完的に使いこなして読んでいられると言われる。そこで学校教育においては、学習者にこれら両方のリーディング処理過程があることを教えることが望ましい。またインプットの量という視点で考えると、トップダウン処理を学んでいた方が、多量のインプットを受けやすい。というのも、一語一文に着目して正確に読むことを第一義とするボトムアップ処理では、おのずとリーディング・スピードが遅くなり、結果として得られるインプットの量も少なくなりがちだからである。

そのように考えると、新出語彙や新出文法を学習しつつ本文を読み進める平成 18 年度版 *NEW CROWN* (以下 *NC*) の教科書本文では、トップダウン処理に特化した読み方の指導は難しいということになる。トップダウン処理を学びインプットの量を増やすには、読み物教材の *Let's Read* が望ましいと言える。*Let's Read* は「読み」に特化した指導ができるよう、未習文法が出ず、未習単語には訳がつけられているからである。そこで、どのようにトップダウン処理を用いた読み方を指導するかについて、*NC2 Let's Read 2 "Zorba's Three Promises"* を例にとって考えてみる。

(1) プレ・リーディング活動を行う

トップダウン処理とは、内容についての大まかな枠組みや内容を予測し、検証しながら読み進めていく方法である。そこで内容予測をより容易にするために、プレ・リーディング活動を行う。指導にあたっては、まず未習語を簡単に説明したのち、場面設定(ゾルバは黒猫で、ある日油まみれのカモメに出会う)と、プレ・リーディングの質問(「ゾルバはどのような役割を果たすでしょうか」など)にふれ、「猫」と「カモメ」といった通常は相容れない関係にある 2 者の間に何が起るのかを予測させる。

(2) 話の始めから終わりまで、通して読ませる

自分が立てた予測に加え、イラストなども参考にさせながら、「わからないところがあっても、推測しながら読んでみよう」と生徒を励まし、読み進めさせる。内容そのものを理解することを重視し、80 ページから 83 ページまで通して読ませるようにする(制限時間を決めておいてもよい)。生徒が読み進める際に、各ページについている *READING HINTS* を参考にさせ、たとえば「ゾルバは卵をど

うしたか」などの大まかな内容がわかっていることを伝え、文脈やイラストから感覚的に英語の表現をつかんでいくように指導する。

(3) 英問英答でしめくくる

読み終わったあと、生徒は POST-READING (83 ページ) の英文の並べ替えを行う。生徒は話の大筋を確認できるし、もう1度、本文に立ち返ることで、英語のインプットを繰り返すことができる。また教師が内容に関する質問をしたり、感想を求めたりすることによっても、同じ効果を得ることができる(たとえば、What are Zorba's three promises? や Is it a happy story or a sad story? Why do you think so? など)。

3. 多読を授業に取り入れる

(1) 中学校における実践例

授業の中でインプットを増やそうとすると、教科書以外のインプット源を見つけ、授業中になるべく多く読ませることも必要となるであろう。まずそのためのヒントとして、福岡県の公立中学校に勤務する島津博文教諭による速読指導の実践例を紹介したい。多読と速読では、その目的において違いはあるが、速読も多読につながるという点で参考になると考えられるからである。島津教諭は、現在は多読指導を実践しているが、前任校である福岡教育大学附属小倉中学校では、速読指導の経験がある。島津教諭が中学校2年生のクラスで実施した速読指導の手順は次のとおりである。

1. 180 語程度の英文をできるだけ速く読む。
2. 英文を隠して、True or False Questions などの内容を把握できたかどうかの設問に答える。
3. 読みの速度 (WPM=Words per Minute) を計算する。

こうした活動を異なる読み物で3回続けるうちに、生徒のWPMは69.7語→100.3語→118.8語と上昇していったと報告している。島津教諭は、生徒の読み方にも変化がみられたとして、「ざっと読んで内容をつかむ‘Skimming’のこつをつかんできているのではないか」と述べている(島津2005, p.172)。

さらに島津教諭は、公立中学校の中学3年生の

選択授業の際に、「100万語多読」(酒井・神田2005)として紹介されている多読を実践し、その活動の留意点として、主に次の2点を挙げている(「英語教育リレーコラム(三省堂)」http://tb.sanseido.co.jp/english/column/relay_bc/20090309.html)。

1. 読んだ語数を記録していくことで、できるだけ多くの英語(単語・表現)に触れる。
2. 辞書は使用せず、自分が読めるものを読んでいくこととする。

そして、生徒が英語力と興味の点で、自分に合った本を見つけやすくするために、150冊の本をとりそろえているという。生徒に読ませたいおすすめシリーズとして、STEP INTO READING(Random House USA), Penguin Young Readers(Pearson Longman), Oxford Bookworms Starters(Oxford University Press)を挙げている。

(2) 多読とほかの活動を組み合わせる

多読を家庭学習ではなく、授業中に実施する場合には、多読とペアワークを組み合わせることも可能である。異なる本を選んで2人の生徒をペアにさせ、20～30分各自で読んだあと、作品タイトル、作家名、またその日読んだページ数などをQuick Book Reportに記入させる。そののち、互いの本について報告させる。簡単なことであれば、英語でやりとりさせる。たとえばA: What kind of book is that? B: It's a mystery story. などである。このようにすると、readingからspeakingへの技能統合が可能となり、生徒同士の英語ではあるが、音声のインプットが増えることにもつながる。また相手の読んでいる本に興味をもって、次は自分も読んでみようと思う動機づけにもつながる。

このように多読や多読に関連した活動は、インプットが限られがちなEFL環境においても、良質で多量のインプットを与える機会を提供する。そのことはまた、リーディングにおけるトップダウン処理の習得にもつながると思われる。

【参考文献】 酒井邦秀・神田みなみ 編著(2005)『教室で読む英語100万語—多読授業のすすめ』大修館書店。
島津博文(2005)「研究の実践1—Reading活動—」森千鶴ほか『実践的コミュニケーション能力を育てる英語科学習活動の研究』『研究紀要』(福岡教育大学・三附属中学校)14号, pp.170-172。

生徒が輝く語彙指導 私の心構え

～笑顔と涙と得点力～

山田 健介

(山形県米沢市立第七中学校)

1. 楽しく力のつくインプット

以下に示すのは、中学校3年間の学習を終えた生徒の生の感想である。楽しく効果的なインプットとはどのようなものかが見えてくると思う。

私は1年生で英語を始めるとき、3年間で英語が話せるようになるとは全然思っていませんでした。でも今は話せるようになりました。

私は小学校のとき、中学校の英語授業は、ひたすら単語を覚えたり、黒板に文章を書いて意味を考えたりするつまらない授業だと思っていました。しかし、先生の授業は違いました。英語の歌を歌ったり、チャンツをやったり、リズムに合わせてやるのがとても多かったです。私はその方が普通に書いているよりは、すごく覚えやすかったです。

2. 中学校英語の2つの力「感動の涙」と「得点力」

私は英語の授業を通して、「自分と人を幸せにできる生徒」を育てるために、自己表現活動を多く取り入れている。生徒は授業中の活動の中で、人とかわる心地よさと楽しさ、深さを学んでいく。その積み重ねの末に、最後のスピーチ活動で感動の涙を流し、中学校を巣立っていくのだ。また、3年生ともなれば受験を意識しないわけにはいかない。得点力にも意識を向けさせている。3年間担当した上記の彼らは高校入試の模擬試験でも平均70点を越え、全体の7割以上の生徒が英検3級以上を取得していた。

その土台となるのは、生徒の中に蓄えられる語彙と表現の量である。自己を表現するにも、誰かの表現を受け取るにも、多くの語彙と表現を体に染み込ませ、使えるレベルまで習熟させなければならない。

そのための方策を、少しばかり紹介させていただく。どれも素晴らしい先輩方に学び、自分の中に落とし込んだものであることをあらかじめお断りしておく。

3. インプットメニュー特選7品！

新学習指導要領により、中学校で学習すべき語彙数は900語程度から1200語程度に増加する。語彙の指導には、今まで以上に意を用いなければならないだろう。アウトプットすることが、語彙・表現を習熟させるための極めて効果の高い方法だと考えるが、そこに辿り着くまでに行っている、インプットの要素が多い活動を7つほど挙げさせていただく。

- 1分間クイズ(後段で詳述)
- Last Sentence Dictation(後段で詳述)
- 教科書音読(後段で詳述)
- チャンツ
- 英語の歌
- Talk & Talk(正進社)※ドリルのページ
- 英語自学(音読筆写, ワーク3回繰り返し)

どの活動でも大切なことは2つ。1つは、できるだけ単語だけの練習は行わず、語句のまとまりや文章でインプットを行っていくことである。単語の綴りや発音、意味だけ完璧に覚えても、その使い方が分からなければコミュニケーションにはつながっていかないからだ。そして、機械的に覚えた単語は、機械的に忘れていく。対して、アウトプット等、自分の言いたいことを、授業で知った単語や表現を用いて書けた・言えた! または、相手の使った単語や表現から相手の気持ちや情報を理解できた! といった感動を伴って英語に触れたとき、それは深く心に残るものである。そんなとき、大量にインプットされた中から、その何割かが、確実にインテイク

されていくのだろう。

もう1つは、何度も何度も繰り返すことである。同じ活動を繰り返したり、以前に触れた単語や表現に、他の題材・教材で繰り返し出会うようにしたりする。そうすることで、生徒はより多くの単語や表現に、知らず知らずのうちに習熟していく。私の場合、インプット活動用のプリントや教科書・ドリルブックの1ページを1度で終えることはない。地道な繰り返しを、どのように授業や家庭学習で仕組んでいくのが大切である。

4. すぐにも取り組める大量インプット活動

ここでは、私の実践している方法を3つほど紹介する。機械的な活動が多くなるため、ペア活動の中で達成感や伸張感が味わえるよう心がけている。

☆1分間クイズ(〇〇秒クイズ)

プリントの左側に教科書本文に出てくる単語・表現を、右側に意味を書いたプリントを用い、リズムカルに練習する。

例)

□□□□ think 思う 考える
□□□□ I think so. 私はそう思う。

この活動はペアで行う。片方が問題を出し、もう一方が答える。出題した生徒が正解かどうかを□にチェックしていく。制限時間内にできるだけ素早くどんどん答えていく。1つのプリントには、30分前後の単語やその単語を含んだ表現が載っている。教科書に載っている表現や覚えてほしい語句などを提示している。

ペアで行うため、自分の役割が与えられる。そうすることで、より意欲的になり、活動に集中できる。そして、その日の目標数以上答えられたペアは、満面の笑顔でハイタッチをする。本当に嬉しそうで、こちらも笑顔になり、元気になる。

☆Last Sentence Dictation (以下LSD)

LSDは、ご存じの先生方も多いと思う。長勝彦先生(元武蔵野大学客員教授)から教わったものだ。

授業冒頭5分間の帯活動として行っている。教科書を用い、既に学習を1度終えているページで行う。以下に私の場合の指導手順を示す。

①ペアになる。

- ②片方が教科書の本文をチャンク毎、日本語に直す。
- ③もう一方がその日本語を英語に直す。
- ④役割を交代する。
- ⑤全ペア終了後、生徒は教科書を閉じ、教師のあとについてシャドーイング。
- ⑥教師が本文を読む。そのページの本文の任意の文の所で音読を止める。その最後に読んだ文 (Last Sentence) を生徒は書き取る (Dictation)。

教師は次時にLSDを行うページを予告しておき、生徒はそのページの練習をしていく。この活動も、地味で根気のいる活動となるが、その効果は、家庭学習での準備とも相まって絶大である。

☆教科書音読

音読はインプットという観点から見ても効果的である。1分間クイズで練習した語句の繰り返しにもなるし、LSDトレーニングの土台ともなる。また、単語だけの学習にならず、文単位でインプットが可能であり、様々な方法を提示することで、飽きずに繰り返しトレーニングを行うこともできる。普段から行っていることのいくつかを以下に示す。

- ・overlapping (教科書CDに合わせて読む)
- ・paced reading (設定時間ぴったり読み終える)
- ・read & look up (スピーキングへの橋渡し)
- ・shadowing (CDのあとから影のように追いかけて読む)
- ・rapid reading (教科書の各ページに制限時間を設定し、各自クリアを目指す)
- ・星読み (これも長先生から教わったもの。教科書本文を5回読んで1つの星を書く。チャンク毎音読し意味を思い浮かべていく赤星読みと通常通りの音読の黒星読みの2種類を課している。)

5. 語彙指導は何のために

指導で大切なことは、なぜ・何のためにといった目的意識であると考えられる。語彙指導も然りではないだろうか。心を耕してこそ語彙は定着する。私は、授業が生徒の笑顔と感動の涙と得点力につながっていくよう、努力しチャレンジし続けていきたい。輝く生徒の姿は、涙が出るほどに最高である。

【参考文献】

長勝彦(編)(1997)『英語教師の知恵袋(上)』開隆堂出版。

英語授業力雑感

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

英語教育を行う上で大切なものは沢山ある。中でももっとも重要なものは授業だと思う。最近、教師力などの「力」のつく言葉がよく見られる。私は、教科書作成という立場から中学生の教育に長年かかわってきた。私には中学生の一人ひとりの顔は見えないが、どういうことを考え、どういう人間に成長してほしいかということを常に意識してきたつもりでいる。教育の本質は、教室という現場でもっとも実現する可能性が高いと思い、今回は授業力をテーマに雑感を述べることにしたい。

1 授業で伝えるもの

教科書が教育観の反映や教育用の素材であるならば、それを咀嚼して生徒に伝えるのは、教師であり、教室の場である。英語教育であるから、英語そのものを教えるのは当然である。英語そのものとは、英語の文法や語彙、発音、英語のコミュニケーションのとり方などである。まず教師は、このような英語を教える力量を持たなければならない。

一方で、英語教育は英語そのものだけを教えていれば良いのだろうか。とりわけ、公教育としての英語教育には、英語教育をとおして人間教育を行うという使命がある。世界のさまざまな文化を学んで視野を広げたり、英語をベースにして言語の働きや意義について考えたり、言葉をとおして人とかかわる体験をすることは、英語教育の重要な側面である。英語の教科書で、なぜインドを題材として取り上げるのだろうか。インドは多民族国家であり、多くの言語が使われている（世界には民族の数だけ言語がある）。また、英国との歴史的なつながりもある。そのため、英語の位置づけを考える上で、一つの典型を示してくれる。インドの中学生がどのような言語生活を送っているのかを知ることによって、日本

の中学生の言語生活との対比もできる。インドは、世界の英語の役割や現状を理解する上で、母語としての英語、第二言語としての英語、外国語としての英語、などを考える素材にもなる。英語教育が「そこに英語があるから教えたり学んだりする」だけでは寂しい。

2 引き出しを増やす

生徒に伝える熱い想いがあっても、授業力は一朝一夕には身につかない。教師の日々の試行錯誤や同僚との学びあいなどの体験が必要である。同じように教えても、生徒が同じように学んでくれるわけではない。授業の導入一つをとっても、文法から導入すべきか、オーラル・イントロダクションから入って文法の理解に結びつけるべきか、決定的な処方箋はない。経験をとおして自分の授業スタイルを確立するほかはないのである。

細かい例になるが、受動態を教える際に、以前は能動態と受動態の文を並列して、いわゆる^{たすき}襷がけの指導をすることが好まれていたが、今はこの指導はあまり好まれない。なぜだろうか。一つには、能動文と受動文では意味が異なる（つまり話題が異なる）からである。もう一つには、実際の言語使用で、「by + 名詞句」の入った受動文が使われることはきわめてまれだからである。

また、受動態については、多くの生徒が受動文をとおして過去分詞と初遭遇することになる。ならば、その際の過去分詞は過去形と同形のもので良いのだろうか、それとも spoken などのような不規則変化形の方がわかりやすいのだろうか。

授業は、習熟度やクラスサイズなど、さまざまな環境の中で行われる。教師は経験を積みながら、指導技術の引き出しを増やしていかなければならない。

3 学び方を教える

教師はとにかく教授法や指導法を意識しがちである。確かに、多くの教授法や指導法に精通していれば、それだけ良い授業ができる可能性が広がるが、根本的に確認しておかなければならないことは、授業の主体は生徒であり、学ぶのは生徒だということである。教師は生徒の学びを促進する立場でしかない。

現在、英語教育の分野で学習ストラテジーの研究が盛んに行われている。これは、学ぶ主体が学習者にあり、どうすれば効果的な学習ができるのかを解明しようとする研究である。たとえば、単語の覚え方にはさまざまな方法がある。生徒によっては得手不得手もあるだろう。そこで教師に求められることは、こうすれば単語が覚えられる、覚えやすいということを教えることである。また、リスニングやリーディングにおいても、どうすれば聴き取ることができたり、読めたりすることができるのかを教えることである。授業力の一つは、引き出しを多くすることだと述べたが、生徒の学習スタイルも学習進度もさまざまであるから、個に応じた指導をするためには、その分だけ手持ちの指導技術を増やしていかなければならない。

4 基礎・基本に立ち返る

近年、学校教育において基礎・基本を定着させることがとりわけ求められるようになった。生徒の立場では、基本的な文法や基本語彙などを着実に身につけていくことである。しかし、教師も英語の基礎・基本にときどき立ち返ってみたい方が良いのではないかと思うことがある。

たとえば、大学生であっても、any や some の用法に戸惑うことがある。彼らにその用法を尋ねると、any は疑問文と否定文で、some は肯定文で使う、と多くの学生は答えてくれる。ここまでは、学校で教えてもらったことなので何とか答えられるが、any が肯定文に出てくると、たちまち行き詰まってしまう。そんなとき、私は any の意味は何かと尋ねる。そして any の「心」、つまり基本的な意味は、種類を問わない、ということだと教えることにしている。

冠詞の a [an] と the をどう教えるかも考えなければならない。ある授業を参観したとき、ちょうど定冠詞の the を導入する場面であったが、楽器には the がつくって教えていた。確かにそのとおりであるが、これでは数限りなく the のつくものを覚えなくてはならない。私は、I have a ball in my bag. This is the ball. が一番わかりやすい導入の例だと思う。ここには不特定の a と特定されていることを示す the の本質的な意味の違いが明示されているからである。さらに言えば、ball に the がついているのではなく、the に ball がついているのだと教えたいと思うくらいであるが、それは行きすぎだろうか。

5 学習空間をつくる

勉強しない生徒が多い、と聞くことが多くなってきたように思う。近年、ヒューマニスティック・アプローチに焦点があてられるようになってきたのは、そのような教室環境が背景にあるからだろうか。

このような中で、学習空間という言葉が注目されている。これは、教室を生徒の学びが促進される環境にするということである。そのためには教師が教師として、また人間として、生徒から信頼を得なければならない。教師と生徒が良好なコミュニケーションを行うこともできなければならない。教師が良好な学習空間をつくることができれば、授業力としての力量はまずは合格点なのではないかと思う。

最後に、私が勤務する大学の教師訓を紹介したい。

進みつつある教師のみ人を教うる権利あり。

教育は結局「人」である。

教育はどこでも、いつでも真剣勝負である。

これはドイツの教育者ディーステルヴェークの言葉であり、本学の教育実習日誌にも掲載されている。ここで言いたいことは、生徒は教師を見ている、ということである。教師は生徒に勉強しなさいと言う前に、自ら学ぶ姿勢を持ち続けること、そして真剣勝負で生徒と対峙して授業を行うべきだということである。このことは、何十年も授業を行っている私の今の課題でもある。今の子どもはそんなに甘くないという声も聞こえてきそうであるが、この教師訓を忘れたときには教師を辞したいと思う。



「時間差テスト」の勧め

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 「定期試験」の常識と問題点

生徒の評価にあたり、その中心となるのが「テスト」による評価であろう。そして、その「テスト」の中心となるのが「定期試験」である。

「定期試験」は、改めて言うまでもないが、一定の学習を終えたあとに、定期的実施される到達度テストである。1学期に2度、「中間試験」「期末試験」として行われることが多いが、「期末試験」のみというところもある。試験の対象となるのは、通常その前の定期試験の試験範囲の後から、当該の試験が実施される前までの学習範囲となる。そして、この定期試験は、生徒が入学してから卒業するまで、定期的実施される。

しかしながら、毎回の定期試験の内容同士が密接に関連づけられているわけではない。それは、定期試験は、それぞれの期間の学習範囲だけを試験対象としているからである。定期試験という枠は同じであっても、中身は毎回異なっている。

ところが、このような定期試験のあり方には、言語学習の特性を考えると、問題点が見えてくる。言語は、それが母語であれ外国語であれ、実はとても長い時間をかけてゆっくりと獲得されるものである。したがって、そのプロセスも、時間的に長いパースペクティブの中で見ていく必要がある。にもかかわらず、「定期試験」というシステムでは、学習直後(1, 2ヶ月の時間は言語習得の時間的なパースペクティブから言うとかかなり短い期間と言える)の理解の具合だけを見ていることになる。

2. 「時間差テスト」の勧め

みなさんは「時間差攻撃」という言葉を知ってい

るだろうか。「時間差攻撃」とは、ミュンヘン・オリンピック優勝の日本男子バレーボール・チームが考案したバレーボールの戦術の1つである。ここでは、これをもじって「時間差テスト」というテストを提案する。この「時間差テスト」とは、教えたときから時間をずらして行うテストのことを言う。たとえば、ある文法項目を教えた直後は、生徒の側もその文法項目がテストされると思って準備しているが、少し時間がたつと、このような意識は薄れてくる。意識が薄れたところで、テストをするのである。このことで、本当の意味で、その文法項目が身につけているのかどうかを見ることができる。

同じ問題でも単に時間をおいてやってみるだけで、出来具合は違ってくるだろう。これによって、定着の度合いを見るのだ。当たり前のことかもしれないが、こうした定着度合いなどは、これまでほとんど注目されてこなかった。もしこのようなテストを実際にやってみれば、いかに「基礎的な(と教師が思っている)事項」であっても、思いのほか身につけていないことがわかるだろう。

また、同じ言語項目であっても、それが現れる文脈であったり、その言語項目が含まれる文の負荷が高かったりすると出来が異なってくるだろう。たとえば、ある学習者が He lives in Tokyo. という文を言えたとしても、それだけで三単現の s が習得されたとは言い切れない。文が長くなったり、使い慣れていない単語を使って文を作ろうとしたりすれば、あるところでは「できた」言語項目の使用が「できなくなる」ことはあるはずだ。この意味では、言語項目の習得というのは、白か黒かというほど単純なものではないのだろう。

3. 「時間差テスト」のもう1つのメリット

時間をおくことで、さらなるメリットもある。「英語」は積み上げ教科であるから、通常学習が進むと、関連する学習項目が出てくることになる。そこで、その新しい学習項目との使い分けができるのかどうかということも、この「時間差テスト」では判断できるようになる。

まず、文法の習得について考えてみよう。文法の習得では、文法形式の処理を身につけなければならない。たとえば、現在進行形では、人称や時制によってbe動詞の適切な形を選択し、その後動詞の原形にingをつけることになる。定期試験では、こうした処理について主に見ていると言えるだろう。しかし、現在進行形を習得したと言うには、これだけでは不十分である。文脈の中で、時制に関わる様々な言語形式のうち、現在進行形がふさわしい場面、その形式を選択できなければならないのだ。

しかしながら、定期試験では、学習した言語材料だけが試験対象となるために、動詞の時制がらみのテストとしては、現在進行形の「決め打ち」のような形となる。これは、テニスにたとえるなら、バックハンドの練習として、バックを打つための球だけを出して、バックが打てるかを見るようなものである。しかし、これができたからといって、実際の試合ではバックが打てるとは限らない。来たボールに対して、バックで打つか、フォアで打つかの判断を瞬時に行って体勢を整えなければならないからだ。

では、このような力を見る「時間差テスト」とはどのようなものか、事例を見てみよう。

()内の語に必要な語を補って下線部に入れ、会話が成り立つようにしなさい。ただし()内の語は必要に応じて形を変えること。

Paul : Where is Mother?

Mr Green : _____ in the kitchen. (cook)

Paul: Oh, I see.

解答 : She is cooking

この問題では、文脈から現在進行形の使用を判断した上で、その形を作らなければならない。

こうして考えてみると、中学で学習する動詞がらみの文法項目だけでも、このような「時間差テスト」の候補はかなりのことがわかる。

- ・be動詞と一般動詞の文の疑問文・否定文の作り方の区別
- ・単純現在と現在進行形の区別
- ・現在進行形と過去進行形の区別
- ・過去形と現在完了形の区別

また、これらの項目同士の組み合わせもあるだろう。たとえば、現在形、過去形、現在完了形の3つの区別となれば、かなりやっかいである。こうして見てくると、多くの定期試験では、これらの対比的な視点が随分と欠落してしまっているのではないかと。

4. 「時間差テスト」応用編

もちろん、「時間差テスト」の対象となるのは、動詞がらみの文法項目とは限らない。前置詞などもいくつかまとまったところで、その使い分けを問うことが必要だろうし、「定冠詞と不定冠詞」も使い分けができるかどうか重要である。

また、意味や言語機能でも同じことは言える。たとえば、canやmayやmustという助動詞には、「…できる」「…してもよい」「…しなければならない」という意味のほかに、可能性に関わる意味もある。これらの意味が出揃ったところで、その使い分けに関する問いかけをしてもいいだろう。

5. 3年間を見通して

受験勉強に向き合って初めて、3年間の学習項目の定着の度合いを知るというのでは、本当は遅すぎるし、学習としても効率的ではないだろう。このようなテストを「定期試験」の中で採用するかどうかは、議論の余地があるかもしれない。しかし、広い意味の「評価活動」においては、「時間差テスト」で見えてくるような定着が図られているかを知ることが非常に重要である。そして、こうした「時間差テスト」を行うためには、3年間を見通した指導と評価の計画を立てることが重要であるのは、言うまでもない。

話す、書く、文法指導を 自在につなぐ

Creative Writing (1)

加藤京子 Kato Kyoko (兵庫県三木市立緑が丘中学校)



① Creative Writing って何？

Creative Writing (以下 CW と表記) とは、与えられたテーマで、想像力を働かせ、絵や写真なども利用し、「自由に」書く writing のことです。一言で言えば、英語で行う創作です。単に writing と呼んでもよいのですが、絵と合えば数語でも成立するのが CW なので、私は区別してこう呼んでいます。

「自由に」とカッコ書きにしたのは、ある文法事項や文章展開のパターンを使うように条件をつけて、その範囲内で自由に書かせるからです。ですから、深い文法理解と習熟をねらって書かせることもできますし、話す活動を行ったあとに、それをもとに書かせたり、書いたものをもとに話す活動や読む活動に展開したりすることもできます。聞く活動のあとで、そのリスニング原稿をモデルとして与えて書く活動を行うこともできます。

CW は、コツをつかめば、書くことの指導が始められる中学1年生から大人まで、どの段階の英語学習者も楽しくコミュニケーション能力を伸ばせる指導方法です。新任の先生にも、「指導がマンネリ化してしまって」と悩んでいらっしゃるベテランの先生にも是非試していただきたいと思い、今回から授業レポートを書かせていただきます。

② 3年間続けるとどこまでできる

1年生の指導から順次紹介する方法もありますが、今回は3年生の指導例をご紹介します。それは、3年生で到達させたい目標があつてこそ、入門期からの指導の着眼点が定まるからです。

'Whale' とある作品を見てください(写真A)。これは、3年生の「野生動物の立場から環境問題を考える」プロジェクト学習の一環として、生徒が夏休みに制作したポスター新聞です。四つ切り画用紙



'Whale' のポスター新聞(写真A)

に動物の生態、特徴、人間社会との間でどのような問題が起きているか、日本文化がこの動物についてのどのようなイメージを持っているか、といったことを、写真や図解とともに英語で紹介しています。

取り上げる動物の選定については、特定の動物に偏らないよう、教師が指定した30種類の野生動物から、同じ動物の作品がクラスで2つまでになるようにして選ばせました。

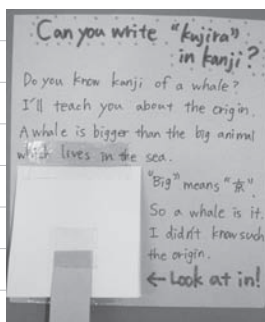
継続して指導すると、3年生の夏休みには教師の手を借りずともこんな作品ができます。

③ 興味をもって読んでもらえるように工夫させる

前述のポスター新聞は展示するものなので、要所では、英語の語句の下にあえて日本語をローマ字で入れさせています。また、ポスター内の4コマのイラスト(写真Aの下段中央)は、捕鯨問題を扱ったコラムの説明イラストですが、このような挿絵や写真、グラフの使用を薦めています。

さらに、CWでは「読み手が興味をもって読んでくれるよう工夫しなさい」ということを入門期から

常に奨励しています。ポスターの Can you write "kujira" in kanji? という記事(写真Aの上段中央)では、四角い紙を引き上げると「鯨」の漢字が見られるようにしてあります(写真B)。



記事の拡大写真(写真B)

文化祭に先立ち、夏休み明けに廊下展示を始めると、下級生までもが集まって作品を見ています。環境教育、理科教育の観点からだけでなく、タイトルのつけ方、紙面構成、それぞれの記事の内容や意見の展開の仕方など、英語教育から見ても非常によい読む材料となっています。同じ動物を取り上げた作品同士を比較して読むこともできます。

英語のまちがいはもちろんありますが、CWではまちがいをゼロにすることよりも、「魅力ある読み物」としてまとめあげる力を育てることを目標にしています。

4. 全員が取り組む

135人いた3年生のうち未提出に終わったのは8名でした。未提出の生徒たちにうまくフォローができなかったことは悔やまれますが、6%ですから少ないと言えます。

全員が書けるように指導する工夫はいろいろありますが、この作品については、以下の工夫を行いました。

- ① 1年生からの継続指導で育った力に見合う課題を設定した。
- ② 教師が作品見本を作り、どういう作品を作ればよいかを示した。
- ③ 大作のように見えるが、それぞれの記事を書いて台紙に貼り付ける、取り組みやすい形式にした。
- ④ 2人で共同制作してもよいことにした。ただし、「友だちに一緒に作ろうと言われても、1人で作りたいときは、はっきり言いなさい。誘うほうも無理強い禁止」という指導も行った。
- ⑤ 色画用紙を学校で準備し、好きな色を選ばせた。

そして何よりも、前提として、生徒と教師の間に「CWはこうあるべきだ」という共通認識をもてるようにしました。

CWでは、入門期から一貫して、それぞれの生徒が表現する気になり、表現したい内容に対して不足している英語力を工夫でカバーし、その工夫を楽しんで書けるように指導します。また、絵やレタリングの美しさを過剰評価せず、発想、英文表現、自己開示性、表現の補助手段をどう工夫しているか、に着目してよい点をほめ、不足する点を指摘しながら指導を積み重ねるのです。

作品の出来ばえはもちろん様々でしたが、どの生徒も自分の作品は誇らしく、取り上げた動物について詳しくなり、特別な愛着を感じてくれています。

5. 書いた作品をベースに話す活動

生徒全員がこのような作品を夏休みに作ると、野生動物と環境問題の関係についての理解や関心が学年全体で共有されます。すると、例えばセヴァン・スズキの「伝説のスピーチ」といった教材も理解しますし、原稿を理解してしまえば、スピーチビデオも興味をもって視聴します。これは中高生に是非見せたいスピーチモデルです。

2学期の半ばには、野生動物の立場から人間に向かってアピールするという、話す活動に取り組みました。夏休みの時点では未習だった関係代名詞や「want人不定詞」といった文法事項を入れ、理解と定着を図っています。表現上必要なので「want人not to不定詞」の形も教えました。

3年生の2学期では、即興性や説得性を指導課題としましたので、次のような型を与え、なりたい動物をその場で選んで話させました。

I am a/an 動物名 which _____

- ① 要求 We want you human beings to _____
理由 _____ 2, 3文
- ② 要求 _____
理由 _____
- ③ 要求 _____
理由 _____
(最後の強調文) _____

授業では、その場で教師が与えた絶滅危惧種について発表させましたが、自分が作成したポスターを黒板に貼って、よく知っている動物について話すという活動もできます。またグループを作り、寸劇の形でその動物が抱える環境問題を人間に訴えるという活動も可能でしょう。

いずれにせよ、全員の生徒が、すでに調べ、工夫し、楽しんでポスター新聞を書き、学習集団が興味・関心を共有しているのですから、話す活動は成功しやすくなります。

6. 書く→話す→書く

書いたものをもとに学級で話す活動に取り組んだあとは、再び書かせます。ただし、話したときよりも長く、辞書も使ってきちんとまとめさせます。



プロジェクト学習の最後の課題(写真C)

この作品は野生動物についてのプロジェクト学習の最後に書かせた課題です(写真C)。文法やつづりなどのまがさも減り、構成もしっかりしています。

「第一、第二、第三」という論理の展開の仕方は、2年生のころから教えますが、何度も使い、また、友人たちの発表や作品に触れているうちに、その便利さや意義に気づくようです。

7. すべての活動をつなぐ Creative Writing

生徒たちは、夏休みにポスター新聞を制作するのに先立ち、教師の作品見本をじっくり読んでいます。セヴァン・スズキのスピーチだけでなく、ALTが話す北米の野生動物についてのスピーチを聞き、そ

の原稿も読みました。学年全員分は無理でも、他の生徒のポスターもたくさん読んでいます。友人たちと意見交換もしたことでしょう。2学期のスピーチ発表やその後のCWでは、3年生で習う文法事項を繰り返し使って理解を深めています。

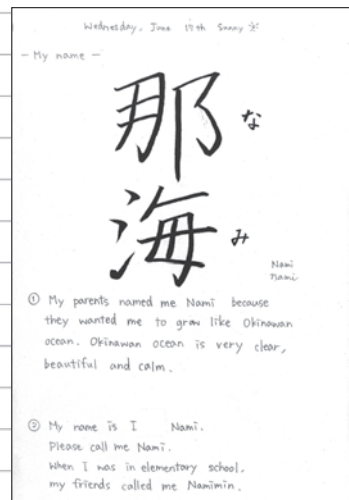
このポスター新聞作りというCWを起点に、生徒たちは「書く」「読む」「話す」「聞く」、文法学習、そして資料を集め、調べ、意見を述べるという総合的な学習活動を行ったのです。

つまり、教師が教えるべき文法事項や教科書の内容に関連させた、そして生徒が「書いてみたい」と思うテーマでCWを仕組みれば、学習は重層化していくわけです。

8. 名前を説明する CW

最後は、自分の名前についてのCWです(写真D)。2題あり、1つ目は (人) named me (名前) because (理由) . で書き始めます。不明のときは自分が望ましい理由を書きます。2つ目の書き出しは My name is (名前) . Please call me (呼び名) . 動詞 name と call の用法の習熟を意図した、文法指導のための課題です。

しかし、この活動は同時に、将来外国人の友人に好印象を与え、すぐに覚えてもらえる名前の紹介の仕方を考える機会となっています。筆ペンで漢字を書き、カナとローマ字で読み方もつけます。次回は、さらにこういった指導例をご紹介していきたいと思えます。



名前のCWの例(写真D)

Just Now

1. はじめに

福岡県最南に位置する大牟田市は、平成9年の閉山まで石炭関連産業地域として日本のエネルギー産業を支えてきた街です。近年は、新しい街づくりに向け、市をあげて様々な取組がなされています。

教育についても、市の特色のひとつとして、平成12年度から全小学校で英語活動を取り組み始め、今年で10年目を迎えています。教育特区ではなく、通常の公立小学校での英語活動であり、しかも、学級担任を中心とした取組です。各学校では、授業を中心に校内研修を行い、子どもの実態に応じて工夫した実践を重ねてきました。また、市教育委員会には、学校の要請に応じ、多様な研修や具体的な支援を行っていただいています。なお本市の英語活動の取組については、市教育委員会のWebサイトをご覧ください (<http://www.e-net21.city.omuta.fukuoka.jp/english/#>)。

明治小学校は、平成18年度に市教育委員会から「英語活動」の研究指定を受けました。また、平成19年度から文部科学省の「小学校における外国語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校、平成21年度は「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」の研究校、さらに、国立教育政策研究所の「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」の協力校として、外国語活動（英語活動）の研究を行ってきました。現在は、県教育委員会から3ヵ年の重点課題研究指定を受け、「コミュニケーション能力の素地を広くむ外国語活動の創造」を主題に、『英語ノート』（文部科学省）等に加えた独自教材の開発と評価の在り方、他教科との関連内容を取り入れた指導計画

学級担任を中心とした 外国語活動（英語活動）の取組

馬場直子 Baba Naoko
(福岡県大牟田市立明治小学校)

の作成、中学校外国語科（英語科）との円滑な接続について等の研究に全職員で取り組んでいます。

2. 学級担任が進める外国語活動（英語活動）

本市では、ALT との T-T の授業は年間数回しかなく、学級担任を中心に外国語活動を行っています。明治小学校でも、「担任を中心に児童と共に楽しむ外国語活動（英語活動）」を合い言葉に実践しています。学級担任が進めるよさには、次のような点が考えられます。

- ・子どもの実態を把握している
 - ・子どもの実態に応じた活動を計画できる
 - ・活動中も、子どもの様子を見ながら指導できる
 - ・教師が英語を話そうとするモデルとなることで、教師の姿を見て子どもも意欲的に活動する
 - ・外国語活動のよさを学級経営に生かすこともできる
- そこで、学級担任が進める外国語活動の充実を図るため、本市・本校の特色である全職員による協働体制で、様々な取組をしています。

3. 外国語活動の授業の推進

新学習指導要領では小学校5・6年生で外国語活動が必修となり、平成23年度の完全実施に向け、各学校ではその準備が急がれています。本校では、5・6年生の担任は、『英語ノート』の内容をもとに、これまでの本校の英語活動の実践を踏まえて、5・6年生の2年間を見通したカリキュラムを作成しました。また、授業では、『英語ノート』に示されたゲームを繰り返したり、活動を入れ替えたり、別の活動を加えたりするなど、子どもの実態に応じた工夫をしています。

外国語活動では、基本的に言葉や文化についての体験活動・ゲーム・交流活動・チャンツ・歌等を中

心に聞く・話す活動を行うことにはなりますが、実践を通して本校なりの毎時間の指導案(5・6年生の70時間分)を作成したところです。

1年生から4年生の担任は、外国語活動の目標や内容、そして、『英語ノート』に基づいて、それぞれの学年の英語活動がどのように外国語活動につながっていくのか、教材・教具の開発を行い、様々な授業を工夫しています。また、全学年とも、毎週水曜日の朝に15分間の「コミュニケーションタイム」を設け、外国語活動に関連した活動を行っています。

また、文部科学省作成のソフトや自作ソフトを使って、電子黒板を用いた授業を進めています。電子黒板は、子どもたちの反応を見ながら、簡単に絵を提示したり、発音や歌を聞かせたりできるし、さらに、絵や写真も自由に動かしたり、加工したりすることができるので、子どもたちの興味を高めながら活動を行うことができます。自作ソフトの作成は、研究主任を中心に、それぞれの担任が行っていますが、全教師の共有教具として職員室に保管し、いつでも使用できるようにしています。もちろん、全ての授業を電子黒板を活用しながら進めているのではなく、必要に応じて効果のある使い方をするように留意しています。

さらに、子どもたちが日常生活を通して英語表現に触れる機会があれば、自然に慣れ親しむことができると考え、学年掲示板の活用やネイティブの音声がか聞こえるアナウンスショット(人が通ったときに音声がかかる装置)の設置、放送委員会による簡単な英語での放送等、校内環境の整備を行っています。



写真 子どもたちも進んで電子黒板を活用する授業

教材・教具の準備では、学習支援ボランティアに手伝っていただくこともしています。そして、教職員の研究や授業の教材・教具の共有化を図るために、校内研究便りの発行や教材コーナーの整備に努めています。

4. 校内研修の充実を

外国語活動を進めていくためには、やはり校内研修を十分に行う必要があります。そこで、本校では、学級担任の意欲の高揚と不安の解消を目ざし、年度当初に年間計画を立て、下図のように研修内容を研究内容と関係づけて、効率的・効果的に行うよう努めています。

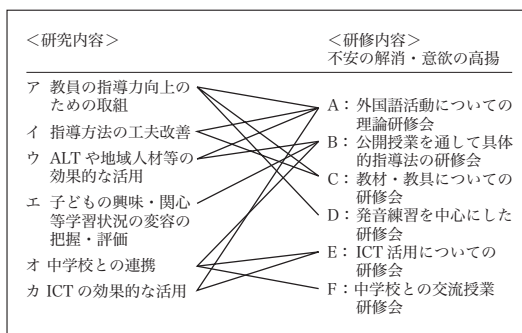


図 研究内容と研修内容

本校の職員室では、誰かが外国語活動の教材・教具を作っていると学年を超えて協力したり、アイデアを出し合ったりしている姿がよく見られます。教師も楽しんで外国語活動に取り組んでいます。だからこそ、子どもたちも意欲的に活動していると思われれます。

5. おわりに

外国語活動の目標は、「コミュニケーション能力の素地を養うこと」です。1年生から4年生に関しては、新学習指導要領等で指針が示されてはいませんが、本校では、この目標を踏まえて取り組んでいます。英語が上手に話せなくても、少くくらい間違っても、許容しています。子どもが人との関わりを楽しみながらコミュニケーションを図る大切さを学んでいくことこそ、外国語活動の目指すところということを忘れず、今後も全職員で授業づくりを考えていきたいと思ひます。

The Perfect *Omiyage* (Part 2)

Don Maybin (Shonan Institute of Technology)

What makes a good *omiyage* for family and friends overseas? The most popular presents can be surprisingly simple. Before traveling, I always visit a local supermarket. *Sembei*, green tea or wasabi-flavored snacks are possibilities, but I head for the candy section. You may not realize the novelty of Japanese sweets, but children — and their parents — around the world do.

My two favorites are Bontan-ame and Kinoko-no-yama. Why are they good gifts? Mushroom-shaped Kinoko-no-yama taste great; but more importantly, with biscuit stems and chocolate caps they are cute. They can, however, cause problems. I once gave Kinoko-no-yama to a friend's 4 year-old daughter in Budapest, Hungary. Everyone wanted to taste these exotic treats so the box was passed around. When it returned to the little girl, there was only one mushroom left! She started to cry so I promised to send another box from Japan, which I did. Still, I wonder how many Kinoko-no-yama she got to eat before the adults found them

As for Bontan-ame, these are my 10-year-old nephew's choice since he uses them to tease his friends! First, he opens the box slowly, telling everyone how delicious these sweets taste. "They are soooo good" Then he gives his unsuspecting victims one cube each. He continues his praise. "These are the best candies in the world." As his friends become irritated, they try to remove the "plastic" wrapper stuck on the cube and have no idea that it is *oburato*, a kind of rice paper you eat. Before everyone throws away their candies in frustration, my nephew pops one into his mouth. What a shock! Many do not believe the wrapper dissolves, but once my nephew has eaten several, the others nervously try theirs — and you have a hit *omiyage*! Now when I visit my nephew, everyone wants a box of Bontan-ame for playing tricks on their own family and friends.

Another simple gift which Japan is famous for is origami. I recently took some students on a

study tour of Turkey. One young woman, Yukiko, brought origami paper, but wasn't sure if it would be useful. One day in a village near the city of Bursa, some women were selling homemade jams by the roadside. As we tasted samples, one woman asked where we came from and Yukiko said "Japan." This brought a friendly smile to the woman's face, but further conversation was difficult. Then Yukiko took out a sheet of origami paper and carefully folded a *tsuru*, or crane. Yukiko passed her little gift to the woman and made a new friend. As a crowd gathered to admire this "on-the-spot" present, the woman appeared with a gift for Yukiko, a pair of mittens she had knit!

At the end of our trip, a good-bye party was held with students in Istanbul. Once again, Yukiko took out her origami paper. Soon all of the young people were lined up, choosing favorite colors as she frantically folded. Later we calculated that Yukiko had folded over 50 *tsuru* and was the hit of the party.

Perhaps the simplest gift that I take overseas is a handful of 5-yen coins. Why are these popular *omiyage*? First, with *kanji* characters and a hole in the middle the coin looks exotic. Second, it tells of Japan's economic success: the stock of rice represents agriculture, the lines below it stand for the ocean and fisheries, and the cogs of a gear cleverly surrounding the hole in the center stand for industry. Best of all, the pronunciation, "go-en", also signifies "good luck" in Japan. People love to learn how Japanese carry a 5-yen coin in their purse to bring prosperity, including my aunt Gwen — whose name is pronounced like the coin!

In fact, an *omiyage* doesn't have to be fancy or expensive. The simplest gift is special if it is chosen with a little imagination and comes from the heart. A 5-yen coin, a *tsuru* made from origami paper, Kinoko-no-yama or Bontan-ame. You'll be surprised at how such common things in Japan become delightful treasures for people overseas.

英語教師の リソース

RESOURCES FOR
ENGLISH TEACHERS

電子黒板とデジタル教材を 使ってみよう

—デジタル教科書:NEW CROWN『デジタルテキスト』—

酒井英樹 Sakai Hideki
(信州大学)



上: NEW CROWN のデジタル教科書
『デジタルテキスト』(三省堂)

右: 電子黒板『SMART Board™』
(日本スマートボードテクノロジーズ)



1. はじめに

本稿では電子黒板による NEW CROWN のデジタル教科書である『デジタルテキスト』(三省堂)の使い方の例を紹介する。菅・梅本(2009)は、電子黒板の利点として、黒板やテレビ画面に投影された画面上から直接操作できること、投影された画像の一部分を拡大できること、画面に直接書き込めること、そして、画面と書き込みを記録・保存できることを挙げている。次の紹介する指導例は、これらの利点を生かすものである。

2. 書き込み機能(ペン機能)を利用した暗唱活動

『デジタルテキスト』の特徴に、英文の表示と文単位での音声再生がある。電子黒板のペン機能を使うと効果的に暗唱活動を実施できる。黒ペン(太字)を選択し、テキストの上から書き込み、英文を少しずつ隠すのである。生徒が読めない場合は、消しゴム機能を使ってすぐに再現させることができる。



電子黒板にはペン機能以外にも、指定された範囲を拡大することのできる機能がある。この機能を使うと、イラストや写真の画像情報に、生徒の注意を集めやすくなる。

3. フラッシュカード機能の活用

『デジタルテキスト』にはフラッシュカード機能もある。この機能で、単語の範囲を設定したり、日本語とあわせて提示したり、文字だけ見せたり、教科書の出現順だけではなくアトランダムな順番に提示順を設定することができる。小単語テストを実施してみよう。あるレッスン(パート毎の設定も可能)の単語を選び、設定する(学習順、手動提示、日本語、音声 off)。そして、1枚ずつカードを見せながら単語を書くように指示する。最後に設定を英語提示にする。単語を見せて各自答えを確認させる。



4. おわりに

小学校外国語活動において、『英語ノート』(文部科学省)のデジタル版も配布されている。今後は、デジタル教材を利用した授業に慣れている生徒が増えると予測される。小中の円滑な接続の促進のために、小学校で使われている活動や指導方法を使ってみるというのも一つのアイデアであると思われる。

【参考文献】 菅正隆・梅本龍多(2009)『小学校外国語活動「英語ノート」対応電子黒板活用ガイドブック』旺文社。

『三省堂 Web Dictionary』 辞書検索サービス

◇インターネットに接続すればいつでもどこでも使えるオンライン辞書の決定版◇
 URL : <http://www.sanseido.net/> ご利用料 : 1年間 3,150円(税込), 6ヶ月間 1,575円(税込)

17タイトルの辞書コンテンツが使い放題!

無料検索

- 『デイリーコンサイス国語辞典 第3版』
- 『デイリーコンサイス英和辞典 第6版』
- 『デイリーコンサイス和英辞典 第5版』

有料検索

◎外国語辞典系

- 『グランドコンサイス英和辞典』
- 『グランドコンサイス和英辞典』
- 『ウィズダム英和辞典 第2版』
- 『ウィズダム和英辞典』
- 『エクシード英和辞典』
- 『エクシード和英辞典』
- 『クラウン独和辞典』
- 『クラウン仏和辞典 第3版』

◎国語辞典系

- 『スーパー大辞林 3.0』
- 『新明解国語辞典 第六版』
- 『コンサイスカタカナ語辞典 第3版』
- 『三省堂故事ことわざ・慣用句辞典』

◎各種辞典系

- 『コンサイス日本地名辞典 第4版』
- 『コンサイス外国地名辞典 第3版』

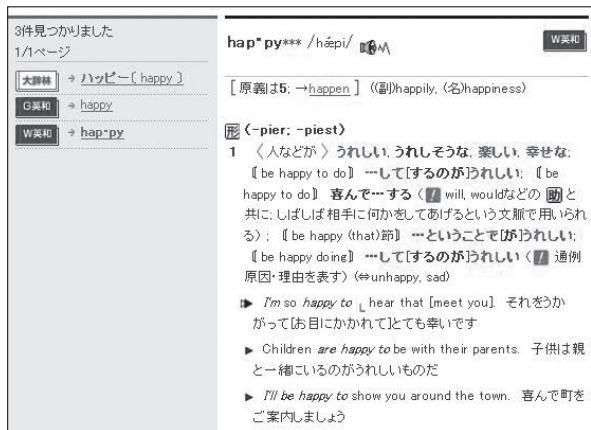


日々進化する最新の Web 辞書

新しい見出し語や項目の追加など随時データを更新
 現在、見出し語総数 200 万語!

複数辞書の同時検索が可能

複数の辞書を同時に検索し解説を見比べることによって深まることばの理解



TEACHING ENGLISH NOW

19号

2010年
 9月1日発行
 定価 80円
 (本体 76円)

編集・発行人：八幡統厚
 発行所：株式会社三省堂
 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14
 電話 (03) 3230-9422 (編集)
 振替 東京 00160-5-54300
 [NEW CROWN ホームページ]
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>
 印刷：三省堂印刷株式会社
 〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9
 電話 (042) 645-6111 (代)

編集後記

三省堂は、Web「三省堂英語教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>)にて、今後も、授業をサポートする資料(年間指導計画表、ワークシートなど)や英語教育に関する情報(コラム、研究会情報など)を掲載していきます。

電子黒板対応の「デジタル教科書」 授業を効率よく進められる、一斉授業向けの教材

NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition

指導用教材（学校採用品）

三省堂デジタルテキスト 1 2 3

各学年 定価 52,500 円（本体 50,000 円+税）

《学校フリーライセンス》

CD-ROM WindowsVista / XP / 2000

- 簡単な操作で音声を再生でき、生徒の集中を高められます。
- 教科書本文の音声を聞いて、それを繰り返し発話することで、教科書内容を着実に身に付けながら、音声面の基礎力を伸ばしていくことができます。
- 従来授業で使用されてきた、音声 CD やフラッシュカードなどの機能があります。

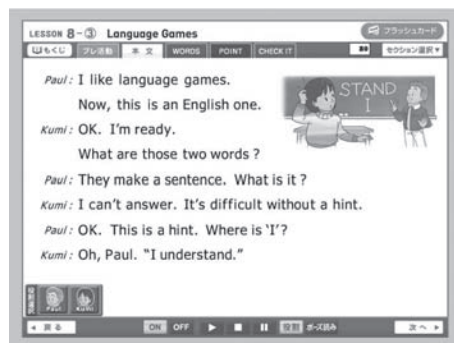


■内容

各課の本文（プレ活動・本文・WORDS・POINT・CHECK IT）や DO IT（LISTEN・TALK・WRITE）、WORD CORNER などの音声 CD の機能のほか、フラッシュカードの機能があります。

■本課本文

- 本文の音声を 1 セクションまとめて、あるいは文単位で再生することができます（CD プレーヤと同じように一時停止することもできます）。
- 文字を非表示することができます（表示の ON/OFF で選択可能です）。
- 会話文は役割分担して練習できます。
- 新出単語のコーナーもあり、本課本文と同様に、音声を再生することができます。



■POINT

音読の練習のほか、「文法のまとめ」にリンクし、文法について学習できます。



■CHECK IT

基本文を聞く活動・話す活動で繰り返し練習できます。



■フラッシュカード

学習範囲を選びながら、新出語をフラッシュカードで学習できます。

■ライセンスについて

本ソフトは、お買い上げいただいた学校内でのご使用に限り、インストールするコンピュータの台数を制限しないでお使いいただくことができます。【学校フリーライセンス】

NEW CROWN ホームページ <http://tb.sansendo.co.jp/english/newcrown/index.html>

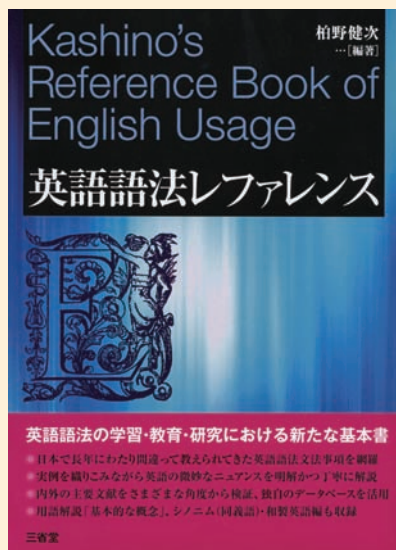
英語語法レファレンス

Kashino's
Reference Book of
English Usage

柏野健次 [編著]

B6変型判 576頁 4,725円 (税込)

発展著しい英語語法研究の成果をハンディにまとめた語法辞典。教育現場で問題化しやすい項目500以上を取りあげ、いまだ繰り返されている学校文法の誤りを、実例によって詳細かつ明解に訂正する。英語学研究者のみならず、英語に関わる者すべての必携書。



教授のおいしい英会話

CD
付き

霜崎 實

ジョージ・ドウ [共著]

四六変型判 192頁

[両編とも] 1,890円 (税込)

好評だったNHKラジオ講座「英会話入門」の3か月コースを、速習2週間で学べるようにコンパクトにまとめた独習書。シチュエーション別に「アメリカ編」と「日本編」の2冊を用意。どちらも、英語のリズムを体得できる音声CD2枚付き。



アメリカ
[編]

日本 [編]

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本社 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

□大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177

□名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212

□九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532

□札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F TEL. 011 (616) 8722